お経で描かれた観音様

お経で描かれた観音様

麻田 実香里

我が家の家宝に、お経で描かれた観音様の掛け軸がある。祈祷師に、お袋の病気が早く治るよ

うにと祈りを込めて描いてもらったものだ。

お袋はおらが中学校に入って間もない頃、急に立って歩くことが出来なくなり、寝たきりになって

しまった。町の名医にも原因を突き止めることの出来きない、不治の病に倒れたのだった。

親父は悩んだ末、水墨画家である叔父に相談し、ある祈祷師にお経で絵を描いてもらうことに

した。

普通の水墨画家は、墨で筆を滑らせるようにして絵を描く。しかしその祈祷師は、極細の筆で、

刻むようにお経の文字を書き連ねて線を描き、絵を仕上げる。虫眼鏡で拡大して見なければ

線が経文だとは分からない程の細かい作業により、絵は完成する。

祈祷師は俗世間から離れ、出雲の山奥で仙人のようにひっそりと暮らしているという。昔、お婆か

らその祈祷師の話を聞いたことがあった。

に人々の祈りを届けることが出来るのだ。そのようにして祈祷師が願をかけ、経文で描いた水墨 界を結ぶ扉のような役割を持つ穴。祈祷師は空に浮かんだ穴を地上から仰ぎ、八百万の神々 出雲には、天界に通ずる空洞がある。その空洞は空にあり、普通の者には見えない。この世と天

画には、難病をも治す力が備えられるという伝説がある。

水墨画家の叔父から、絵が完成したので取りに来いという連絡が入った。親父は農作業を中断

家に絵を持ち帰った親父は、庭で遊んでいた六人の子どもたちに向かって座敷に来るよう大きな

声で叫んだ。親父の意見は絶対だった。

し、急いで叔父の工房に足を運ぶ。

座敷に急いで行くと、神棚の横には観音様の絵が掲けられている。

「これが祈祷師に頼んで描いてもらった絵だわや。お母の病気が良くなるよう、みんなで祈らこい」 医者に見放されたお袋。もう、家族一丸となって祈るしか手立てはない。

やる事なす事すべてが豪快な親父にはいつも圧倒されっ放しで、血の繋がった親子といえども一定

の距離を置いていた。しかし、この時ばかりは親父に食らいついてお袋を守ろうと、親父の顔を睨むよ

うにじっと見つめた。

おらは、その絵を、お経の観音様、と名づける。

"お経の観音様"の絵に顔を近づけ、何と書かれているのだろうと観察するが、あまりの文字の小

ささに解読することは無理だった。ただ、お袋が回復するようにと必死の思いが込められていること

は、紛れもない事実だろう。

きに巫女が手に持って鳴らす鈴のようなものが付いている。衣全体にも経文が書いてあり、皆の願い もしれないが、決して美人ではないものの愛嬌のある容姿で、庶民も親しみやすい。黒々とした長い を身にまとってくださっているようだ。 髪は高々と結い上げられ、冠のような飾りで髪が留められている。ふくよかな頬、小さくきゅっと結 "お経の観音様"は、ぽってりとしていて背はやや低め。六等身くらいだろうか。観音様に怒られるか んだ口元、目は半開であり、素足で蓮の花の上に立つ。手に持つ細長い棒の上には、神楽を舞うと

"お経の観音様"の掛け軸が家に来た、次の日の夜のことである。

を見上げると、お月様が欠けることなく堂々と夜空に浮かんでいる。太陽に負けまいと照らす月 明かり。銀色に光る円の中に、お経の観音様、の顔を重ね合わせた。 暑苦しい家の中を逃れ、庭に置いてある木製の長椅子に腰掛けた。肌をかすめる風が涼しい。空

満月を見ているうちに、閃く。

今夜は昼間のように明るい月夜だ。お袋を猫車に乗せて散歩するというのはどうだろう。いつも寝

たきりでは気持ちが参ってしまう。

農作業に使う一輪の手押し車は、時として親孝行の道具にもなる。我ながら名案を思いついた

ものだ

満月の夜に願ったことは叶う。子供のころ月夜の晩になると、お婆が話をしてくれた。

思い立つと居ても立ってもいられなくなり、納戸で寝ているお袋の枕もとへ駆け寄った。

「お母! 今夜は昼みたいに外が明るいけん、散歩するか。お母は猫車に乗らっしゃい。おらが押す

わ!

くりと寝返りをうち、白い顔をおらの方に向け、か細い声で答える。 お袋が病人ということをつい忘れ、障子を勢いよく開けて部屋に飛び込んでしまった。お袋はゆっ

「寛三——」

お袋はおらの名前を呼び、無理するなと言った。

「おらはもう中学生だけん、お母を猫車に乗せて歩くことくらい何ともないわや」 お袋の手をとり時間をかけて慎重に乗せ、猫車を押して月に照らされた明るい夜道を歩いた。

は痩せて小柄なので猫車がぐらついて転びそうになることもあった。

猫車のタイヤは一つしかなく安定感がない。お袋は病人なので普通の大人よりは軽かったが、おら

しかし、お袋の喜ぶ顔見たさに、腰、腕、へその下にぐっと力を込め、よろけないよう踏ん張る。

「お母、外は気持ちがいか?」

「ああ、気持ちいいわ――。寛三、すまんのう」

お袋は、久しぶりに見るすっきりとした表情を浮かべ、しばしば目もとを手で押さえていた。

月の光を浴びながら、お経の観音様、に、深く深くお辞儀する。

おらは毎日の朝晩にお袋の寝床へ膳を運び、二人で食事を摂っていた。

月夜に猫車で散歩したあくる日の朝、布団に横たわっているはずのお袋がいない!いつも、少し髪

を乱して寝ているのに。

その日の朝は驚いたことに誰の手も借りずに立ち上がり、きゃしゃな身体を鏡に映して着物の乱

れを直しているではないか!

『お経の観音様』に伝えられている奇跡が起こった瞬間だった。

お袋は、両手を襟元に置いて頬をほんのりと桜色に染めつる、雪の結晶のような儚さがあった。

お袋の元へ歩み寄る。

「おはよう、寛三。あらら、お前シャツがまた裏表 反対じゃないかね」

少し笑いながら、お袋は言った。

おらは、おっちょこちょいなのでランニングシャツを反対にして着ることが度々ある。シャツの裾を見ると、

書くか糸で名前を縫いこんでくれていたので、シャツの裏側を表にして着ていることはすぐに分かった。 裏に書かれているはずの。寛三』という文字が表になっていた。お袋は、シャツの裏に名前をマジックで

頭を掻きながら、急いでいたからと言い訳をする。

久しぶりにお袋がおらの身の回りのことを気にかけてくれたと思うと、少し照れくさかった。

奇跡はそれだけではなかった。病気で倒れる前と全く同じというわけにはいかないが、お袋は体の負

担にならない程度に畑仕事をするようになったのだ。

学校から帰ると鞄を玄関に放り投げ、畑へ一目散に走っていき農業を手伝う。

お袋が元気だった頃と変わらない生活が再び始まった。

"お経の観音様"のお陰にあやかってから、一年後。

お袋はこの世を去った。

満月の夜に猫車で散歩する機会は、二度とやってこなかった。

お袋が亡くなった日の夕暮れに、縁側でお婆と肩を並べて沈む太陽を眺めていると、お婆がぽつ

りぼつりと話し始める。

夕陽は時として、ひとつの時代の終わりを告げることがある。人は、それを受け入れなければなら

ないのだと。

その言葉のお陰で、お袋の死を素直に受け入れることが出来たように思う。

新月の夜のことだった。

お婆は続けて、新月から始めた物事は成就するものだと言った。

「寛三、おまえは絵がわりかし上手いけん、おつぁんに水墨画を習ったらどげかや」

五十年が過ぎ、今はおらの嫁、そして長男夫婦と暮らしている。

奇跡を起こしてくださった。お経の観音様、の掛け軸や他の水墨画を時々押入れから出しては、

焼酎の入った紙コップを片手に眺める。濃いめの焼酎を飲みながら絵を鑑賞する時間は、この上な

く安らかなひととき。

"お経の観音様"の掛け軸を目の前にしてお袋のことを懐かしく思っていると、台所でいつもの喧嘩

腰の会話が耳に飛び込んできた。

おらの嫁と長男の嫁の言い争いだ。

「ちょっと! お義母さん! フライパンはどこですか!? 同じ場所に置いてもらわないと困りま

「どうせ私は馬鹿だけん! フライパンの場所も決められんわ。すんませんね!」

俗にいう、嫁姑戦争というやつだろう。

(とばっちりを受ける前に畑にでも出るか)

紙コップを手に持ち、中身がこぼれぬよう気を配りながら胡坐を解いて立ち上がった。紙コップは

何度も洗って使っているので、柔らかくなり皺が寄っている。こぼれないよう細心の注意を払って立ち

上がらなければ、焼酎がこぼれてしまうのだった。

畑の草取りのことを考えながら、腰をそろそろと持ち上げ、お経の観音様、に背を向けたそのと

き、お袋の声が頭の中で線香花火のように光った。

(寛三、焼酎も酒も程々にな。それからおまえ、逃げ足が速くなったなぁ)

焼酎をこぼしそうになりながら振り返り、掛け軸の中にいらっしゃる。お経の観音様、の顔を凝視

した。

てしまう癖は、還暦を過ぎた今でも直らない。 着ていたランニングシャツの裾を見ると、。寛三』という文字が表になっている。シャツを裏表反対に着

「こりゃ参った」

ぽりぽりと頭を掻きながら肩をすくめた。

おらは、飼い犬の青い首輪についている鎖を左手で持ち、右の肩に鍬を担いで畑へ向かった。

真夏の照りつける日差しが少し冷めてきた日暮れに、赤く染まった農道を犬と歩く。

斜陽の真っ赤な掌が、おらの背中をふわりと前に押してくれるような暖かさ。お袋のぬくもりが

蘇り、足が前へ軽やかに進む。

いきなり、犬が激しく吠えながら走り出した。

そのとき、"お経の観音様"の起こしてくださった奇跡が再び起きるのではという予感がした。お袋

があの世から帰ってきて元気な姿を見せてくれるかもしれない。畑に着いたら、お袋は鍬で土を耕す

のを止め、寛三と呼んでくれるのではないだろうか。せめて中学校を卒業するまでは、お袋と一緒に

過ごしたかった。

座敷に掛けておいた。お経の観音様』を思い、心の中で掌を合わせる。

ふと、前を向いて歩いていた犬がおらの顔をちらりと見たので、誰にも話したことのない心の内を犬

に呟いた。

男ってもんはな、いくつになっても母親が恋しいものよ。

――村一番の美人で働き者だった自慢のお母に、どうかもう一度会わしてごしなはい。

限り無く広がる夕焼け空に、はにかみながら話しかける。

てきたためか、最近やたらと頚の後ろに痛みを感じる。次第に指先の痺れが強まり、動きも鈍く た皮膚は、もう少年の頃のように引き締まってはいない。若い頃からお袋の分まで農業に精を出し 右の肩から鍬を下ろし、頭上に赤々と広がる縁の無い掛け軸に掌を重ねてみた。皺だらけになっ

なってきた。趣味の水墨画をいつまで描き続けられるだろうか。

不安をかき消すように、もうすぐ生まれる初孫の顔をたそがれの空一面に描いてみた。

「おらもいよいよお爺だが、お母」

目尻に大きな線を何本も刻み、山の頂に太陽が近づいてくるのを眺める。

掌の向こうでは、山々と交わろうとしている落陽が包み込むように優しく、その日の終わりを告

小説「お経で描かれた観音様」

「出雲の空には天界に通ずる空洞がある。空洞を仰ぎ願をかけ、祈祷師は経文で絵を描いた。ある難病を患う女性を救うために――」

「お経で描かれた観音様」とは、出雲地方に住む祈祷師により経文を連ねて描かれた観音像の掛け軸のこと。

その観音像が起こした奇跡とは――。

悩める読者の心を少しでも癒すことが出来れば幸せだ。 そんな思いを込めて書いた作品です。

★☆総合誌「季刊山陰」第12号(平成20年6月1日発行)に掲載されました★☆

編集人:古浦義己、森麻子

WEB: 松江現代文学館http://www.mable.ne.jp/~koura/

発行人: 菊地幸介

発行所:島根日日新聞社

【作者のプロフィール】

麻田 実香里

Blog: http://asadamikari.seesaa.net/

Twitter: https://twitter.com/asada_mikari

Mail: asadamikari@crenjoy.biz

☆出雲の国にて、スピリチュアル文学の修行をしています。